

ザリガニ

私の郷里浜松も、子供の頃は蓮の田んぼがあちこちにあった。その頃は舗装道も少なく、砂利道を自転車を引きながらよくザリガニを獲りに行った事がある。自転車の後ろに三角網をつけてハンドルにバケツを括って走ったこともある。

ゴム草履から足をはみ出して、夏の炎天下の中を田んぼに向かった。蓮の田んぼは水が蒸発して、あちこち底の泥が乾いてひび割れて顔を出している。目を凝らすとその泥を盛りあげるようにしてザリガニの巣がみえる。中には甲羅干しでもするかのようの外に出て日光浴をしている、乾いた泥が白っぽくなったものもある。巣の穴に溜まって



いるわずかな水に体を浸して顔だけを覗かせているものもいる。

泥の中に足を踏み入れて餌にするためのザリガニをまず捕まえた。尻尾を剥がして皮をむいて持ってってきた糸にくくった。バケツを片手に巣を捜す。こいつを餌にして何匹も吊り上げてはバケツに入れて家に持って帰った。

折れた蓮のはっぱをのけると茎の辺りから糸を引くように樹液が伸びる。蓮の実は空に向かって大きく広がり、中には種が奇麗に上を向いて並んでいるようにみえる。この蓮の根っこが蓮根だとははじめは知らなかったが、今でも興味深い植物だと思っている。

家に戻ると庭の小さな池に



放してあげたが、それほど長くは生きてくれなかった。環境をしつかりと整えてあげなかったのと、彼らの飼育に対してそれほど熱心ではなかったからだろう。

そんなことを思い出しながら、アメリカ人の友人と駐車場を後にした。あれは私が4カ月ほどオレゴン州のポートランドに住んでいた頃のことである。ライトレールと呼ばれるちんちん電車は、京都や豊橋などで走っているものとは違い、余り情緒のない近代的な路面電車であるが、中心街を抜けるようにして走っている。

この町でもう100年前後の歴史があるというあるシーフードレストランに入った。少し薄暗い店内の壁には昔の広告の紙が張られていたり、珍しいものはしっかりと額にいれられて装飾の役目を果たしていた。

あちこちで海産物の匂いが湯気とともに空気に混ざって私の臭覚を刺激していた。覗き込むつもりもないのに、周りのテーブルに目がいつてしまう。食欲は十分のようであった。

メインの食事を決めてウェイターが席を立とうとした時、同席のアメリカ人が何かを思い出したかのように突然立ち上がり、ウェイターに追加注文をした。周りの音で何を

注文したかは聞こえなかったが、得意げに笑みを浮かべる彼の顔つきから、この店の名物の類を頼んだものと理解した。

コーヒーを飲みながら、仕事の話に熱が入り、私達の頭からもそろそろ熱気でも立ち上がり始めようとした時、ウェイターが誇らしげに、湯気をもうもうと吹き上げる大皿にのった前菜を持ってきた。テーブルの真ん中にどかっとおかれたその大皿には、紛れもないアメリカザリガニたちが赤く茹で上がって私を見つめていた。

